

【 第 140 聖詠 第 8 調 】

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格 給

まあえ、しゅよわれにききたまあえ。  
主 我 聽 給

しゅよなんぢによぶすみやかにわれにいたりた給  
主 爾 呼 速 我 格

まあえ、なんぢによぶときわがいのりの  
爾 呼 時 我 禱

こえをいれたまえ、しゅよわれにききた給  
聲 納 給 主 我 聽 給

まあえ、ねがわくはわがいのり  
願 我 禱

はこうろのかおりのごとおくなんぢが  
香 爐 か 香 如 爾

かんばせのまえにのぼおり、わがてを  
顔 前 登 我 手

あぐるはくれのまつりのごとくいられん  
擧 暮 祭 如 納

しゅよわれにききたまあえ。  
主 我 聽 給

誦經) しゅ わ くち まもり お わ くちびる もん ふせ たま わ こころ よこしま ことば  
主よ、我が口に衛を置き、我が唇の門を扞ぎ給え、我が心に邪なる言

かたぶ ふほう おこな ひと とも つみ いいわけ なか ねが われ かれら  
に傾きて、不法を行ふ人と共に、罪の推諉せしむる母れ、願わくは我は彼等の

あまみ な ぎじん われ ばつ こ きょうじゅつ われ せ こ い うるわ  
甘味を嘗めざらん。義人は我を罰すべし、是れ 矜 恤 なり、我を譴むべし、是れ極と 美

あぶら わ こうべ なや あた もの ただわ いのり かれら あくじ てき かれら  
しき 膏、我が 首 を悩ます能わざる者なり、唯我が 禱 は彼等の悪事に敵す。彼等

しゅちょう いわお あいだ さん わ ことば にゆうわ き われら つち ごと き くだ  
の 首 長は巖石の 間 に散じ、我が 言 の柔和なるを聴く。我等を土の如く斫り碎き、

わ ほね ちごく くち ち お しゅ しゅ ただわ め なんぢ あお われなんぢ たの  
我が 骨は地獄の口に散りて落つ。主よ、主よ、唯我が目は 爾 を仰ぎ、我 爾 を恃む、

わ たましい しりぞ なか わ ため もう わな ふほうしゃ あみ われ まも たま  
我が 靈 を退くる母れ。我が爲に設けられし 罅、不法者の網より我を護り給え。

ふけんしゃ おのれ あみ かか ただわれ す え  
不虔者は 己 の網に罹り、唯 我は過ぐるを得ん。

### 【 第 1 4 1 聖詠 】

わ こえ もつ しゅ よ わ こえ もつ しゅ いの わ いのり そのまえ そそ わ うれい  
我が 聲を以て主に呼び、我が 聲を以て主に禱り、我が 禱 を其前に注ぎ、我が 憂

そのまえ あらわ わ たましい うち よわ とき なんぢ われ みち し わ ゆ みち  
を其前に 顯 せり。我が 靈 の衷に弱りし時、 爾 は我の途を知れり、我が行く路

おい かれら ひそか わ ため あみ もう われみぎ め そそ ひとり われ みと  
に於て、彼等は 竊 に我が爲に網を設けたり。我右に目を注ぐに、一人も我を認む

もの われ のが ところ わ たましい かえりみ もの しゅ われなんぢ よ  
る者なし、我に遁るる 所 なく、我が 靈 を 顧 る者なし。主よ、我 爾 に呼びて

い なんぢ われ かくれが い もの ち おい われ ぶん わ よ き たま  
云えり、 爾 は我の避 所 なり、生ける者の地に於いて我の分なり。我が呼ぶを聴き給

われはなはだよわ われ はくがい もの すく たま かれら われ つよ  
え、我 甚 弱りたればなり、我を迫害する者より救い給え、彼等は我より強けれ

ばなり。

わ たましい ひとや ひ いだ われ なんぢ な さんえい たま  
⑩ 我が 靈 を 獄 より引き出して、我に 爾 の名を讚 榮せしめ給え。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きょう  
兄弟よ、肉體にて 齋 し、 靈 にても 齋 せん。凡 の不義の 結 を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かね あた むしゆく もの いえ  
迫の 霜 を斷ち、凡 の不正なる 書 券を裂き、飢うる者に糧を與え、無 宿 の者を家に

い かみ おおい あわれみ え ため  
入れん、ハリストス神より 大 なる 憐 を得ん爲なり。

なんぢおん われ たま とき ぎじん われ めぐ  
⑨ 爾 恩を我に賜わん時、義人は我を環らん。

けいてい にくたい ものいみ たましい ものいみ およそ ふぎ むすぼれ と きょう  
兄弟よ、肉體にて 齋 し、 靈 にても 齋 せん。凡 の不義の 結 を解き、強

はく わな た およそ ふせい かきつけ さ う もの かね あた むしゆく もの いえ  
迫の 霜 を斷ち、凡 の不正なる 書 券を裂き、飢うる者に糧を與え、無 宿 の者を家に

い かみ おおい あわれみ え ため  
入れん、ハリストス神より 大 なる 憐 を得ん爲なり。

⑧ 主よ、我 深き 處 より 爾 に呼ぶ。主よ、我が 聲 を聴き 給え、

如何なる 徳、如何なる 譽 も、之を 聖 者に 歸すべし。蓋 彼等は 爾 天を 傾 けて 降

りし者の 爲に 己の 首を 劍の 下に 傾 け、爾 己を 罄して 僕の 形 を受けし者の

爲に 其血を 流し 爾の 謙 卑に 効いて、死に 至るまで 降れり。神よ、彼等の 祈禱に 因

りて、爾 が 恵の 多きを 以て 我等を 憐み 給え。

⑦ 願わくは 爾の 耳は 我が 禱の 聲を 聴き 納れん。

神の 實見者 たる 使徒等よ、實に 無形の日 たる イススは 爾等を 光れる 電の 若

く、全世界に 遣して、爾等の 神聖なる 傳教の 光明にて 誘惑の 暗を 退け、無

知の 幽暗に 深く 圍まれたる 者を 照せり。我等にも 光照と 大なる 憐とを 降さん

ことを 彼に 祈り 給え。

⑥ 主よ、若し 爾 不法を 糺さば、主よ、孰か 能く 立たん。然れども 爾に 赦あり、人

の 爾の 前に 敬まん 爲なり。

イリヤは 齋に 照され、諸 徳に 因りて 神聖なる 車に 登りて、天の 高きに 擧れり。

吾が 謙卑の 靈よ、彼に 効いて、凡の 惡心と、猜忌と、争闘と、儂き 逸樂とを 制

するを 以て 齋と 爲せ、ゲエンナの 永遠なる 甚しき 苦惱を 免れて、ハリストスに 呼

ばん 爲なり、主よ、光榮は 爾に 歸す。

⑤ 我 主を 望み、我が 靈 主を 望み、我 彼の 言を 恃む。

神聖なる 使徒等、世界の 爲に 至りて 熱心なる 祈禱者、正 教の 者の 守護者よ、我

等 爾 最 尊 ぎ者に 求む、ハリストス 我等の 神の 前に 勇 敢なる 力を 有ちて、我等の

爲に 祈り 給え、我等が 齋の 好き期を 安らかに 送りて、一 性なる 三者の 恩 寵を受

けん 爲なり。尊 榮なる 大 傳道師よ、我等の 靈の 爲に 祈り 給え。

④ 我が 靈 主を 待つこと、番 人の 旦を 待ち、番 人の 旦を 待つより 甚 し。

しゅ なんぢ とうと なんぢ せいせいしゃ きせき おんちよう たま かれ ち しきよく  
主よ、爾は尊き爾の成聖者ニコライに奇跡の恩寵を賜いて、彼を地の四極

えい かれ はなはだ わざわい あ うれい いざない うち あ ふふく つね そのほご  
に榮し、彼を甚しき災禍に遭い、憂患と誘惑との中に在りて俯伏して常に其保護

もと もの たため ふじよしゃ な たま  
を求むる者の爲に扶助者と爲し給えり。

ねが しゅ たの けだしあわれみ しゅ おおい あがない かれ  
③願わくはイスライリは主を恃まん、蓋憐は主にあり、大なる贖も彼にあり、

かれ そのことごと ふほう あがな  
彼はイスライリを其悉くの不法より贖わん。

しゅ なんぢ とうと なんぢ せいせいしゃ きせき おんちよう たま かれ ち しきよく  
主よ、爾は尊き爾の成聖者ニコライに奇跡の恩寵を賜いて、彼を地の四極

えい かれ はなはだ わざわい あ うれい いざない うち あ ふふく つね そのほご  
に榮し、彼を甚しき災禍に遭い、憂患と誘惑との中に在りて俯伏して常に其保護

もと もの たため ふじよしゃ な たま  
を求むる者の爲に扶助者と爲し給えり。

ばんみん しゅ ほ あ ばんぞく かれ あが ほ  
②萬民よ、主を讃め揚げよ、萬族よ、彼を崇め讃めよ、

しゅ なんぢ せいせいしゃ しんせい きとう よ あわれみ た ちゅうしん なんぢ か  
主よ、爾の成聖者の神聖なる祈禱に因りて憐を垂れて、忠信に爾の勝た

けんべい ふくはい なんぢ しょぼく およそ わざわい もろもろ うれい およ しょてき こうげき  
れぬ權柄に伏拜する爾の諸僕を凡の禍、諸の憂、及び諸敵の攻撃より

のが たま  
脱れしめ給え。

けだしかれ われら ほどこ あわれみ おおい しゅ しんじつ なが せん  
①蓋彼が我等に施す憐は大なり、主の眞實は永く存す。

せい われら なんぢ しゅさい まえ てんたつしゃおよ ねつしん ほごしゃ たも  
聖ニコライよ、我等は爾を主宰の前に転達者及び熱心なる保護者と有ちて、

ちゅうしん なんぢ はし つ よ われら むな なんぢ おおい しりぞ なか なんぢ じ  
忠信に爾に趨り附きて呼ぶ、我等を空しく爾の帡幪より退くる母れ、爾の慈

れん なんぢ しょぼく うえ た いた たま  
憐の爾の諸僕の上に垂るるを致し給え。

【 生神女讚詞 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす、いまも  
光榮父子聖神歸今

いつもよおよに、アミン。  
何時世よ世に、アミン。

かみのよめえよ、わがいためるこころ  
神 聘女 我 傷 心

のたんそくをみいよ。じゅんけつむてんなるど  
歎息 見 い よ 。 純 潔 無 瑕 童

うていぢよマリィアよ、じんあいなるに  
貞 女 仁 愛

よりて、わがてをあげるをいれえ  
因 我 手 舉 容

て、これをしりぞくるなかあれ、  
之 退 勿

わがなんぢじんるいをとうとくせしものをうた  
我 爾 人 類 尊 者 歌

いてとうとまんだめなあり。  
尊 爲 あり。

【 聖入 】

司祭) 睿智、<sup>えいち</sup> 肅<sup>つつし</sup>みて立て、<sup>た</sup>

【 聖ソフロニイの祝文 】

せいにしてふくたるじょうせいなるてんのちちの  
聖 福 常 生 天 父

せいなるこうえいのおだやかなるひかりイイ  
聖 光 榮 穩 光

ススハリストスよ、われらひのいりにいたりく  
我 等 日 入 至 暮



れのひかりをみて、かみちちとことせいしん  
 光 見 神 父 子 聖 神  
 をうとおう。いのちをたもうかみのこ  
 歌 生 命 賜 神 子  
 よ、なんぢはいつもけいけんのこえにてうたわ  
 爾 何 時 敬 虔 聲 歌  
 るべし、ゆえにせかいはなんぢをあがめ  
 故 世 界 爾 崇  
 ほむ。

【 第一の提綱 プロキメン 】

司祭) つつし 謹 き みて聴くべし、しゅうじん 衆 へいあん 人に平安、えいち 睿 つつし 智、謹 き みて聴くべし。

誦經) だいご プロキメン、しらべ 第五の しゅ 調、なんぢ 主よ、われら 爾 たも は我等を保ち、われら 我等 まも を護りて、こよ 斯の世より えい 永

えん 遠 いた に至らん、

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
 主 爾 我 等 保 我 等 護  
 りて、このよおよりえいえんにいい  
 斯 世 永 遠 至  
 たらん。

誦經) しゅ 主よ、われ 我 すく を救い給え、たまた 蓋 けだしぎじん 義人は絶えたり、た

しゅよ、なんぢはわれらをたもち、われらをまも  
 主 爾 我 等 保 我 等 護



誦經) <sup>しゅ なんぢ われら たも われら まも</sup> 主よ、爾は我等を保ち、我等を護りて、



司祭) <sup>えいち</sup> 睿智、

誦經) <sup>そうせいき よみ</sup> 創世記の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 創世記 1章24節～2章3節 】

誦經) <sup>かみい ち いきもの そのるい したが かちく はうもの ち けもの そのるい したが</sup> 神曰えり、地は生物を其類に従いて、家畜と、昆虫と、地の獸とを其類に従  
<sup>さん すなわち かな かみ ち けもの そのるい したが かちく そのるい したが</sup> いて産すべし。即、斯く成れり。神は地の獸を其類に従いて、家畜を其類に従

<sup>ち もろもろ はうもの そのるい したが つく かみこれ み よし かみい ひと</sup> いて、地の諸の昆虫を其類に従いて造れり。神之を觀て善とせり。神曰えり、人

<sup>われら ぞう われら しょう したが つく かれ うみ うお そら とり けもの か</sup> を我等の像と我等の肖とに従いて造るべし。彼は海の魚と、天空の鳥と、獸と、家

<sup>ちく ぜんち ち は ところ もろもろ はうもの つかさど かみすなわちおのれ ぞう したが</sup> 畜と、全地と、地に匍う所の諸の昆虫とを宰るべし。神乃己の像に従い

<sup>ひと つく かみ ぞう したが これ つく これ なんによ つく かみかれら しゅく い</sup> て人を造り、神の像に従いて之を造れり。之を男女に造れり。神彼等を祝して曰

<sup>う ふ ち み これ おさ またうみ うお けもの そら とり もろもろ</sup> えり、生めよ、殖えよ、地に充てよ、之を治めよ、又海の魚と、獸と、天空の鳥と、諸

<sup>かちく ぜんち ち は ところ もろもろ はうもの つかさど かみまたい み われなんぢ</sup> の家畜と、全地と、地に匍う所の諸の昆虫とを宰れ。神又曰えり。視よ、我爾

<sup>ら ぜんち おもて あ たね ま ことごと くさ およ ま たね いだ み むす ところ</sup> 等に、全地の面に在る種を蒔く悉くの草、及び、蒔くべき核を懐く實を結ぶ所の

<sup>ことごと き あた こ なんぢら かね な またち すべ けもの そら すべ とり</sup> 悉くの樹を與えたり。此れ爾等の糧と爲らん、又地の凡ての獸、天空の凡ての鳥、

<sup>およ ち は ところ すべ はうもの およ いのち もの われしよく すべ あお くさ あた</sup> 及び地を匍う所の凡ての昆虫、凡そ生命ある者には、我食として凡ての青き草を與

えたり。即<sup>すなわち</sup>斯<sup>か</sup>く成<sup>な</sup>れり。神<sup>かみ</sup>は其<sup>その</sup>造<sup>つく</sup>りし<sup>こと</sup>悉<sup>ごと</sup>くの物<sup>もの</sup>を觀<sup>み</sup>て、甚<sup>はなはだ</sup>善<sup>よ</sup>しとせり。夕<sup>ゆう</sup>あり朝<sup>あさ</sup>

あり、是<sup>こ</sup>れ第<sup>だ</sup>六<sup>いろく</sup>日<sup>じつ</sup>なり。斯<sup>か</sup>く天<sup>てん</sup>地<sup>ち</sup>及<sup>およ</sup>び其<sup>その</sup>悉<sup>ごと</sup>くの装<sup>そう</sup>飾<sup>しよく</sup>は成<sup>な</sup>れり。神<sup>かみ</sup>は第<sup>だ</sup>六<sup>いろく</sup>日<sup>じつ</sup>に其<sup>その</sup>造<sup>つく</sup>

りたる工<sup>わざ</sup>を竣<sup>お</sup>え、第<sup>だい</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>じつ</sup>に其<sup>その</sup>造<sup>つく</sup>りたる<sup>こと</sup>悉<sup>ごと</sup>くの工<sup>わざ</sup>より息<sup>やす</sup>めり。神<sup>かみ</sup>は第<sup>だい</sup>七<sup>しち</sup>日<sup>じつ</sup>を祝<sup>しゆく</sup>し

て、之<sup>これ</sup>を聖<sup>せい</sup>にせり、蓋<sup>けだし</sup>斯<sup>こ</sup>の日<sup>ひ</sup>に於<sup>おい</sup>て神<sup>かみ</sup>は造<sup>つく</sup>りたる其<sup>その</sup>悉<sup>ごと</sup>くの工<sup>わざ</sup>より息<sup>やす</sup>めり。

【 第二の提綱 】

司祭) 謹<sup>つつし</sup>みて聽<sup>き</sup>くべし、

誦經) プロキメン、第<sup>だ</sup>六<sup>いろく</sup>の調<sup>しらべ</sup>、主<sup>しゆわ</sup>我が神<sup>かみ</sup>よ、願<sup>かえり</sup>みて我<sup>われ</sup>に聽<sup>き</sup>き給<sup>たま</sup>え、

しゆわが かみよ、かえりみて われに ききたま  
主我 神 願 我 聽 給  
あ え。

誦經) 主<sup>しゆ</sup>よ、我<sup>われ</sup>を全<sup>まつた</sup>く忘<sup>わす</sup>るること何<sup>いづれ</sup>の時<sup>とき</sup>に至<sup>いた</sup>るか、爾<sup>なんぢ</sup>の面<sup>おもて</sup>を我<sup>われ</sup>に隠<sup>かく</sup>すこと何<sup>いづれ</sup>の  
時<sup>とき</sup>に至<sup>いた</sup>るか、

しゆわが かみよ、かえりみて われに ききたま  
主我 神 願 我 聽 給  
あ え。

誦經) 主<sup>しゆわ</sup>我が神<sup>かみ</sup>よ、

かえりみて われに ききたま あ え。  
願 我 聽 給

【 祝福 】

司祭) 睿<sup>えいち</sup>智<sup>つっし</sup>、肅<sup>た</sup>みて立<sup>た</sup>て、ハリストスの光<sup>ひかり</sup>は衆<sup>しゅうじん</sup>人<sup>てら</sup>を照<sup>てら</sup>らす。



誦經) <sup>しんげん よみ</sup> 箴言の讀、

司祭) <sup>つつし き</sup> 謹みて聽くべし、

【 箴言 2章1～22節 】

誦經) <sup>わ こ なんぢも わ ことば い わ いましめ おのれ うち おさ か なんぢ みみ</sup> 我が子よ、爾若し我が言を納れ、我が誠命を己の衷に藏め、斯くして爾の耳

<sup>ちえ かたぶ なんぢ ころ さとり む も ちしき よ さとり む こえ あ</sup> を智慧に傾け、爾の心を聰明に向け、若し知識を呼び、聰明に向かいて聲を揚

<sup>げ も ぎん ごと これ もと たから ごと これ たづ すなわちなんぢしゅ おそ おそれ さと</sup> げ、若し銀の如く之を求め、寶の如く之を尋ねば、則爾主を畏るる寅畏を曉

<sup>かみ し ちしき え けだししゅ ちえ あた ちしき さとり そのくち い かれ</sup> り、神を知る知識を獲ん。蓋主は智慧を與え、知識と聰明とは其口より出ず、彼は

<sup>ぎじん ため すくい そな かれ なお ゆ もの ため たて かれ こうぎ みち たも その</sup> 義人の爲に救を備う、彼は直く行く者の爲に盾なり、彼は公義の途を保ち、其

<sup>せいしゃ みちすぢ まも か ごと なんぢ こうぎ こうはん せいちよく いつさい よ みち</sup> 聖者の諸途を守る。是くの如くして爾は公義と公判と正直と一切の善き道

<sup>とを さと ちえ なんぢ ころ い ちしき なんぢ たましい たのし とき すなわち しりよ</sup> とを曉らん。智慧爾の心に入り、知識爾の靈に娛しからん時は、則思慮

<sup>なんぢ まも さとり なんぢ たも こ なんぢ あ みち いつわり い ひと すく</sup> は爾を守り、聰明は爾を保たん、是れ爾を惡しき途より、虚偽を言う人より救

<sup>い なお みち はな やみ みち ゆ もの あく おこな たの あくしゃ よこしま</sup> い、直き途を離れて幽暗の路を行く者より、惡を行うを樂しみ、惡者の邪侈を

<sup>よろこ もの そのみち まが そのこみち まよ もの すく ため なんぢ いんぶ ことば</sup> 喜ぶ者より、其途の曲り、其徑に迷う者より救わんが爲、爾を淫婦より、言

<sup>を もつ へつら おんな そのわか とき きょうどうしや す かみ やく わす もの すく</sup> を以て諂う婦より、其少き時の教導者を棄てて、神の約を忘れたる者より救

<sup>わんが ため けだしかれ いえ し ひ そのこみち しぼうしや おもむ かれ い もの みな</sup> わんが爲なり、蓋彼の家は死に引き、其徑は死亡者に趣く、彼に入る者は皆

<sup>かえ またいのち みち のぼ ゆえ なんぢぜんになんぢ ゆ ぎじん みちすぢ したが けだし</sup> 歸らず、亦生命の途に上らず。故に爾善人の途を行き、義人の諸途に循え、蓋

<sup>ぎじん ち お え むてん もの こ とどま しか あくにん ち ほろぼ</sup> 義人は地に居るを得、無玷の者は此れに留まらん、然れども惡人は地より滅ぼさ

<sup>れ もと もの これ ねたや</sup> れ、悖れる者は之より根絶されん。

司祭) <sup>なんぢ へいあん えいち ねが わ いのり こうろ かおり ごと なんぢ かんばせ まえ のぼ</sup> 爾に平安、睿智、願わくは我が禱は香爐の香の如く爾が顔の前に登り、

<sup>わ て あ くれ まつり ごと い</sup> 我が手を擧ぐるは暮の祭の如く納れられん。

※ 願わくは我が禱は、、、へ